

本徳行者仙念

— 200回忌記念 —

会期:平成29年 10月14日(土) ▶ 12月10日(日)



光明偏照
十方世界
念佛衆生
捨取不捨

記念講演

10月15日(日) 《13:30~15:00》

「紀伊国での徳本の足跡」

塩路善澄氏(正覚寺住職)

於:有田市文化福祉センター3階 大会議室

10月21日(土) 《13:30~15:00》

「徳本上人絵伝の絵解き」

畠山澄男氏(誕生院住職)

於:有田市郷土資料館

11月11日(土) 《13:30~15:00》

「女性救済と徳本」

俵谷和子氏(西宮市立郷土資料館)

於:有田市文化福祉センター3階 大会議室

11月18日(土) 《13:30~15:00》

「仏教史の中の徳本」

寺西貞弘氏(前当館館長)

於:有田市文化福祉センター3階 大会議室

11月25日(土) 《13:30~15:00》

「有田の徳本行者」

木谷智史(当館学芸員)

於:有田市郷土資料館

後援 日高町教育委員会 有田市文化協会

趣旨

江戸時代後期に活躍した徳本行者(1758-1818)は、全国を行脚し、多くの信者を集めました。口で名号を唱える称名念仏を多くの人々へ進め、名号を唱えることを約束したものに「南無阿弥陀仏」と記したいわゆる徳本名号を授けました。

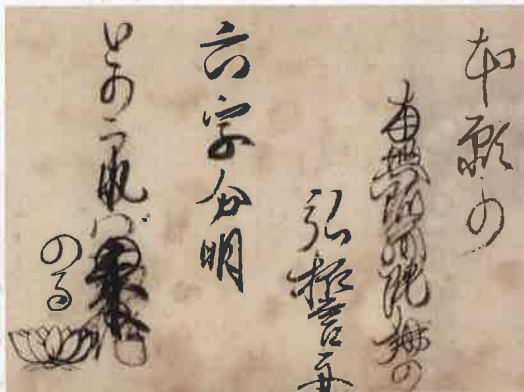
徳本行者は、日高郡志賀(和歌山県日高町)に生を受け、紀伊国内さまざまな場で苦行を積みました。法然院(京都府)での除髪後は、関東へ下向します。その道中、止宿する地には、徳本行者の噂を聞きつけた多くの人が、名号を授か

るために押し寄せたといいいます。小石川一行院(東京都)にて入寂するまで実に多くの人に教えを説いてきました。このように徳本行者は、全国的な信者を得た高僧だったといえます。

徳本行者の二百回忌に合わせて、紀中に伝わる徳本行者の資料を一堂に集め、徳本行者の紀伊国での実像に迫りたいと思います。

第一章 徳本と信仰

徳本行者は、童名を三之丞(通称重助(十助とも))といました。幼少のころから念仏に励み、二十七歳のとき往生寺(和歌山県御坊市)の大円和尚のもとで得度し、名を「徳本」と改めました。その後、紀伊国各地で苦行を積み、徳本行者の信仰は、紀伊国で形成されたといっても過言ではありません。そして、今でも徳本行者の修行した地には、多くの資料が伝わっています。各地に伝わる資料から、徳本行者の紀中での足跡を辿ります。(右図:誕生院蔵 徳本上人絵伝〔部分〕)



第二章 ありだの徳本

徳本行者は、有田市宮原町の岩室山にて約七年間もの修行を行いました。そのとき、身の回りのことを熱心につとめたのが宮原町に住んでいた栄助です。栄助は、徳本行者から多くのものを授かりました。授かった多くのものは、縁あって、油屋を営んでいた吉田秋久のもとへいきます。吉田秋久は、天保六(1835)年に西法寺を開基し、徳本行者に関わる資料を多く寄進しました。寄進された資料は、現在も西法寺に伝わっています。これまであまり公開されることのなかった有田市に伝わる徳本行者の関連の資料を一挙に展示します。(左図:西法寺蔵 徳本上人置文〔部分〕)

第三章 徳本とひとびと

徳本行者は、訪ねてくる多くの民衆に、「南無阿弥陀仏」と記された徳本名号を渡しました。救われたい民衆の誰にでも手を差し伸べる徳本行者には、多くの弟子・信者がいました。徳本行者の危篤・入寂を往生寺へ伝えた手紙、三十三回忌に、岩室山の修行場に建てられた碑、誕生院の成立など、徳本行者の弟子・信者の動きに注目します。(下図:誕生院蔵 誕生院扁額元書)



有田市郷土資料館

有田市箕島27 文化福祉センター内4階
(JRきのくに線 箕島駅 南へ徒歩5分)

開館時間 9:30~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日

